

「指定文」および関連する構文の構造と派生

西垣内 泰介

gauchi@shoin.ac.jp

「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会

2015年6月6日

1. 「中核名詞句」と「指定文」

(1) 東京が日本の首都だ。

本論文で展開する分析では、「指定文」は、2つの項をとる名詞句—「中核名詞句」とよぶ—から派生する。「中核名詞句」の外項（「日本」）が主要部名詞「首都」の意味範囲を限定 (delimit) し、内項（「東京」）がその意味内容を「構成する」(constitute) または「過不足なく指定する」(exhaustively specify) という関係を持つ。

(2) [_{NP}日本 (の)] [_{N'}東京 (という)] [_N首都]]

「中核名詞句」の内項が焦点化されることで「指定文」が派生される。焦点化された要素が変項を含む構成素の意味を「過不足なく指定する」という関係が「指定文」の性質を説明する上で決定的に重要な概念である。

2. 「指定文」の特性と「中核名詞句」

2.1. 「指定文」の特性

(3) What I am pointing at is a kangaroo. (Higgins 1973: 9, 例 (12))

「指定文」としての解釈 (predicational reading):

(4) That (animal) is a kangaroo. (Higgins 1973: 9, 例 (13))

「指定文」としての解釈 (specificational reading):

(5) What are you pointing at? (Higgins 1973: 10, 例 (15))

(6) I am pointing at the following thing: a kangaroo. (Higgins 1973: 10, 例 (16))

(7) 「疑似分裂文」の文頭の節は意味的「空所」(gap)（「変項」(variable)）を含むものであり、これが焦点要素によって埋められる、すなわち「指定」(specify) されなければならない。(Akmajian 1970: 19)

Den Dikken (2005: 311):

(8) 「指定的疑似分裂文」は次のもので構成される：

- 変項を含む構成素
- その変項の値を（過不足なく (exhaustively)）指定する構成素
- その2つの主要構成素を連結するコピュラ

(9) [What_x I am pointing at _x] is a kangaroo.
variable copula value of *x*

(10) I am pointing at a kangaroo.

Higgins (1973) は英語の名詞化表現 (nominalization) を含む「指定文」の分析を提示している。(Higgins 1973: 150, 例 (46))

- (11) a. John's dream is to better himself.
b. My reason is that I don't have time.
c. *John's inability is to swim.
d. *My anger was that Bill had lied.

- (12) a. [_{NP}John's dream [_αto better himself]] is ___
b. [_{NP}My reason [_αthat I don't have time]] is ___
c. * [_{NP}John's inability [_αto swim]] is ___
d. * [_{NP}My anger [_αthat Bill had lied]] is ___

(13) [_{NP}John's dream _x] is [_αto better himself]
variable copula value of *x*

(14) 補文がコピュラ文の述語補部の位置を占めることができるのは、その補文が主語の名詞句が指し示すもの内容 (content) ないし構成 (constitution) を与えるときである。(Higgins 1973: 150)

(15) 「指定文」の「焦点」は変項を含む構成素の意味内容を過不足なく (exhaustively) 指定していなければならない。

Den Dikken (2005: 311):

- (16) a. what John did was (John) read the newspaper
b. what did John do? — (John) read the newspaper

西山 (2003: 131): 「この構文は、『誰が (どれが) …であるか』という疑問文とそれにたいする答えを単一の文のなかで実現している文である」

(17) 日本の首都 (がどこかと言えば、それ) は東京だ。

Karttunen (1977: 10):

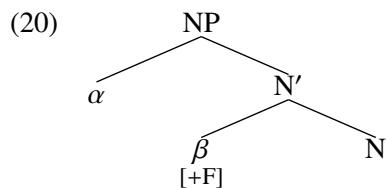
- (18) (間接) 疑問文はその疑問文に対する真であり、完全な (complete) 答えを合同して構成する (jointly constitute) 真である命題の集合をその外延とする (denote)。

Engdahl (1986: 154):

- (19) Who is coming to dinner?

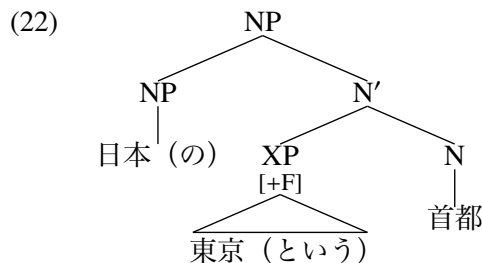
Engdahl (1986: 154): 「この質問をした人は実際にディナーに来るのが John と Mary である場合に、‘John.’ という答えでは納得しないだろう」 → 「答えの完全性」 (completeness of answers)

2.2. 「中核名詞句」と「指定文」



- (21) 「中核名詞句」の主要部 N は、外項 α が N の意味的領域を限定 (delimit) し、内項 β [+F] が α によって限定された N の意味内容を「構成する」 (constitute) 意味内容を持つ範疇である。

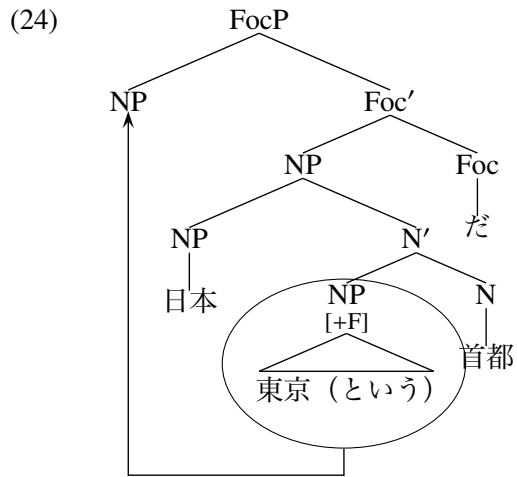
- (??) a. 東京が日本の首都だ。
b. 日本の首都は 東京だ。



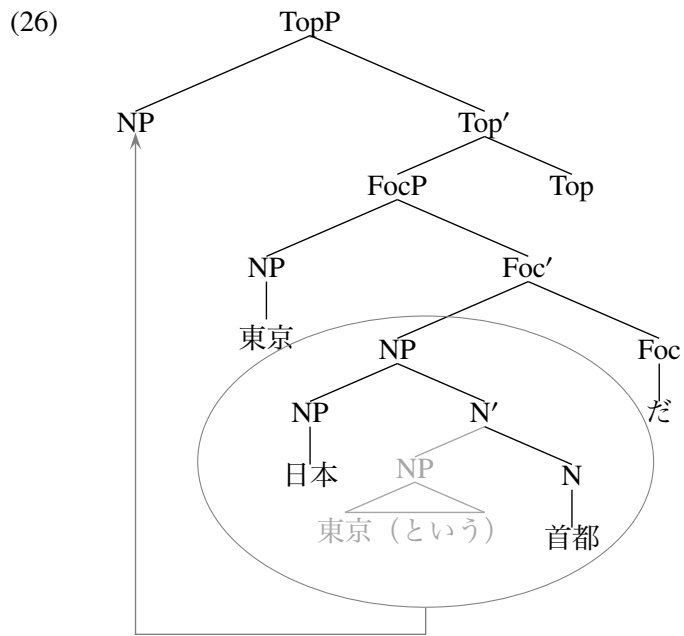
外側の項 α として「日本」が現れて、「首都」の意味領域、つまりどこの首都であるかを限定 (delimit) する。内項 β を占めるのが「東京」で、「日本」によって限定された「首都」を「構成する」「過不足なく指定する」という関係が成り立っている。

- (23) 東京が [日本の x 首都] だ。
value of x variable copula

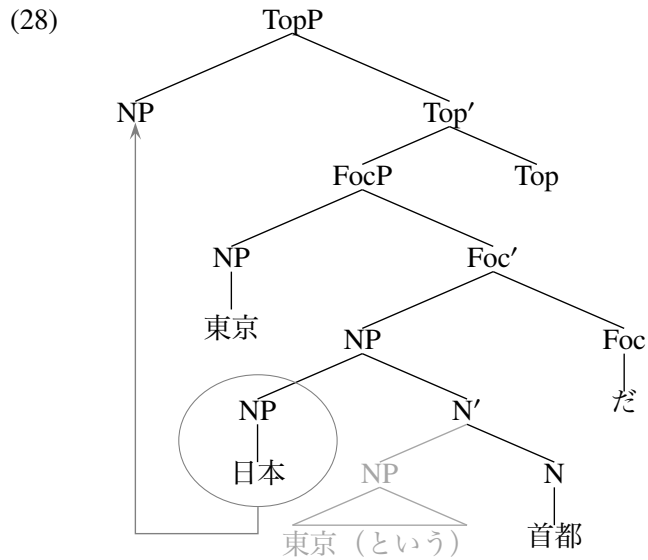
3. 「指定文」の派生と統語的構造



(25) 東京が日本の首都だ。 = (1a)



(27) 日本の首都は東京だ。 = (1b)



(29) 日本は東京が首都だ。

外項「日本」が FocP 指定部に移動すると、非文法的な文が派生される。

(30) *日本が東京{の / という}首都だ。

(31) 東京は日本の首都だ。

(32) *東京は日本が首都だ。

4. 「自分」の逆行束縛

4.1. 現象

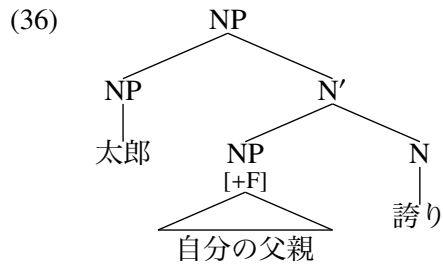
三宅 (2011: 106, 例 (7), (8)):

(33) a. 自分_iの父親が太郎_iの誇りだ。
 b. 自分_iの長い髪が太郎_iの自慢だ。

(34) a. 太郎_iの誇りは自分_iの父親だ。
 b. 太郎_iの自慢は自分_iの長い髪だ。

4.2. 「心理名詞」と「指定文」

(35) a. 太郎の自分の父親 (という) 誇り
 b. 太郎の自分の長い髪 (という) 自慢



(37) [_{FocP} 自分の父親が [_{NP} 太郎の [_{N'} 自分の父親 (という) 誇り]] だ]

(38) [_{TopP} [_{NP} 太郎の [_{N'} 自分の父親 (という) 誇り]] は [_{FocP} 自分の父親が [_{NP} 太郎の [_{N'} 自分の父親 (という) 誇り]] だ]

(39) [_{TopP} 太郎は [_{FocP} 自分の父親が [_{NP} 太郎の [_{N'} 自分の父親 (という) 誇り]] だ]

(31) 東京は日本の首都だ。

(40) *自分_iの父親は 太郎_iの誇りだ。

(41) *太郎_iが自分_iの父親の誇りだ。

(42) * [_{NP} 自分_iの父親 [_{N'} 太郎_i (という) [誇り]]]

(43) a. * 太郎_iの {尊敬 / 軽蔑} は自分_iの父親だ。

b. * 自分_iの父親が 太郎_iの {尊敬 / 軽蔑} だ。

(44) * 太郎_iの自分_iの父親という {尊敬 / 軽蔑}

(45) a. 太郎_iの {尊敬 / 軽蔑} の対象は自分_iの父親だ。

b. 自分_iの父親が 太郎_iの {尊敬 / 軽蔑} の対象だ。

(46) 太郎_iの自分_iの父親という {尊敬 / 軽蔑} の対象

(43) と (45) の対比は、「心理名詞」の中にも「非飽和名詞」として働くものとそうでないものがあることを示している。三宅 (2011) があげている「心理名詞」のリストを次に示す。

(47) 心理名詞

誇り, 自慢, 恐れ, 悩み, 喜び, 楽しみ

5. 量化表現をふくむ束縛関係

- (48) a. so_i の発祥地が (すべての) 民族音楽 $_i$ の本場だ。
 b. (すべての) 民族音楽 $_i$ の本場は so_i の発祥地だ。
 c. (すべての) 民族音楽 $_i$ は so_i の発祥地が本場だ。
- (49) * (世界の民族音楽のフェスティバルで,) so_i の愛好者と演奏者が (すべての) 民族音楽 $_i$ を楽しんだ。

(50) [_{NP} (すべての) 民族音楽 $_i$ [so_i の発祥地 (という) 本場]]

疑問文の「関係的解釈」(relational interpretation) (Engdahl 1986: 325, (3)):

- (51) Q. Which woman does *no man* love?
 A. *His* mother-in-law.

このような「関係的解釈」の疑問文とその答えを内包しているのが、次の Geach (1962) によって議論されている「指定文」である。

(52) The woman that every Englishman loves is his mother.

われわれの「指定文」(48ab) に対応する「関係的解釈」の疑問文と答えにあたるのが次の対話である。

- (53) Q. 民族音楽の本場は (たいてい) どこですか?
 A. その発祥地です。

ここでも、「指定文」と疑問文およびその答えの関係の間の平行した特性を見ることができるのである。

6. Pro に関連する議論

- (54) 山河ワタルです。〇〇大学大学院で意味論の勉強をしています。
 a. 鈴木教授が指導教員です。
 b. #鈴木教授は指導教員です。
 c. 指導教員は鈴木教授です。
 d. #指導教員が鈴木教授です。

(55) [_{NP} pro [_{N'} 鈴木教授 (という) 指導教員]]

Kuroda (1992):

- (56) a. [pro 大麻を買うこと] は 禁じられている。
 b. [子どもが pro 買うこと] は 禁じられている。

- 任意の指示 (arbitrary reference) の pro: cf. Hasegawa (1984), Huang (1984)

- (57) a. [_{VNP} pro その町の破壊] は、失敗だった。
 b. [_{VNP} 敵軍の pro 破壊] は、失敗だった。

(58) [_{FocP} 鈴木教授が [_{NP} pro [_{N'} 鈴木教授 (という) 指導教員]] です]

(59) [_{TopP} pro [_{FocP} 鈴木教授が [_{NP} pro [_{N'} 鈴木教授 (という) 指導教員]] です]]

空主題を持つ「カキ料理構文」

(60) [_{TopP} [_{NP} pro [_{N'} 鈴木教授 (という) 指導教員]] は [_{FocP} 鈴木教授が [_{NP} pro [_{N'} 鈴木教授 (という) 指導教員]] です]]

- (61) 先生は患者さんと医者が言い。(『毎日新聞』読者川柳 (2015年3月2日))
 a. (自分の) 患者が先生だ。
 b. 先生は (自分の) 患者だ。

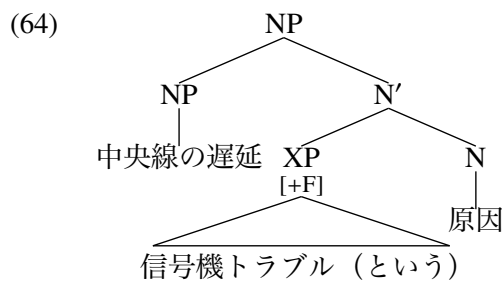
(62) [pro [(自分の) 患者 (という)] 先生]

- (61') a. 子は親の鏡
 b. [pro [親の鏡 (という) [子]]]
 c. 親の鏡が [pro [親の鏡 (という) [子]]] だ

7. 事象・命題の関係を表す非飽和名詞

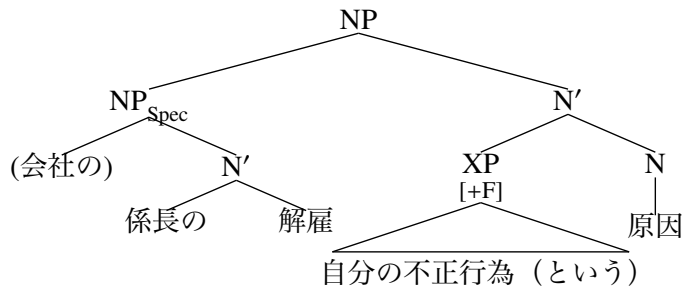
西川 (2013):

- (63) a. 信号機トラブルが中央線の遅延の原因だ。
 b. 中央線の遅延は信号機トラブルが原因だ。



- (65) a.?*自分_iの不正行為が会社による係長_iの解雇の原因だ。
 b.?*会社による係長_iの解雇の原因は自分_iの不正行為だ。
 c.?*会社による係長_iの解雇は自分_iの不正行為が(その)原因だ。

(66)



8. XをYに...する

8.1. コントロール

- (67) a. 地図をたよりに, 人をたずねる。(三宅 2011: 75, 例 (23))
b. その男は 私を相手に 冗談ばかり言っていた。(三宅 2011: 75, 例 (26))

(68) [_{NP} pro [_{N'} 私 (を) 相手]] に

(69) 自分_iの昇任を誇りに, 山田くん_iは営業成績を上げつづけた。

(69') [pro_i [自分_iの昇任を誇り]] に, 山田くん_iは営業成績を上げつづけた。

(70) ?*自分_iの昇任を誇りに, 山田くん_iの営業成績が上がった。

(71) 三宅 (2000: 81):

Y は, S 中のいずれかの項と同一の指標を持つ空の代名詞 (pro) の限定を受けており, その空の代名詞は Y が [-飽和性] の場合にのみ認可される。

X を (pro_i の) Y に, [_S ... Arg_i ...] (“Arg” は “項” を表す)

8.2. 「事象」を含む関係

- (72) a. 住民の通報が犯人逮捕のきっかけだった。
b. 犯人逮捕のきっかけは住民の通報だった。
c. 犯人逮捕は住民の通報がきっかけだった。
- (73) a. 住民の通報をきっかけに, 警察が犯人の居場所をつきとめた。
b. 住民の通報をきっかけに, 犯人の居場所が (警察によって) つきとめられた。
c. 住民の通報をきっかけに, 犯人の居場所が判明した。

(74) [_{NP} pro [_{N'} 住民の通報 [_N きっかけ]]]

外項の pro が主節の特定の項ではなく、主節全体がコントローラとなると考えれば、(73a-c)の例文の特徴を捉えることができる。

「横方向移動」(sideward movement) cf. Hornstein (2001)

(75) [_{NP} 犯人の居場所が判明した (こと) [_{N'} 住民の通報 [_N きっかけ]]]

この名詞句の指定部を占める節 (IP) を「横方向移動」によってコピーする。

(76) [_{NP} 犯人の居場所が判明した (こと) [_{N'} 住民の通報 [_N きっかけ]]] [_{IP} 犯人の居場所
が判明した]

これによってできた左側の構成素 (NP) と右側の IP をマージし、コピーの元位置の要素の音形を削除することで最終的な出力が得られる。

(77) [_{IP} [_{NP} 犯人の居場所が判明した (こと) [_{N'} 住民の通報を [_N きっかけ]]] に [_{IP} 犯人の
居場所が判明した]]

(78) チャドとスーダンを舞台に、両超大国のつばぜり合いが激化している。(三宅 2011:
75, 例 (25) を改訂)

「舞台」は「つばぜり合い」の「事象」と「チャドとスーダン」という「場所」の関係を表す「非飽和名詞」である。

8.3. 「肴」「素材」

- (79) a. 天ぷらと刺身を肴に、日本酒を酌み交わした。
b. 包装用のプラスチックを素材に作り上げたこの製品。

三宅 (2011: 75-6): 「[(79a)] は“日本酒の肴”とは言えるが“日本酒を酌み交わした肴”とは解釈しにくいし、[(79b)] は“作品の素材”ならよいが、“この作品を作り上げた素材”はおかしい」

- (80) a. 日本酒を酌み交わした (ときの) 天ぷらと刺身という肴
b. この製品を作り上げた (ときの) 包装用のプラスチックという素材

- (81) a. ??天ぷらと刺身を肴に、日本酒を3合注文した。
b. ??包装用のプラスチックを素材によく売れているこの製品。

(82) するめと缶詰を肴に、飲み会 (??パーティ) が朝までつづいた。

8.4. 「理由」

(83) 「体力の限界」を理由に、同力士が引退届を提出した。(三宅 2011: 75, (25) を改訂)

- (84) a. 「体力の限界」が同力士が引退届を提出した (ことの) 理由だ。
b. * 「体力の限界」が同力士の理由だ。

(85) [_{NP} 同力士が引退届を提出した (こと)の] [_{N'} 「体力の限界」 (という)] [_N 理由]]

(86) a. 「体力の限界」を理由に、同力士によって引退届が提出された。

b. * 「体力の限界」を理由に、引退届が事務局に届いた。

c. * 「体力の限界」を理由に、引退届の提出があった。

(87) ?? 「体力の限界」を理由に、理事長が引退届を受理した。

(88) 書式の不備を理由に、理事長が引退届を棄却した。

久野 (1978), Sells (1987), 西垣内 (2015b) などで分析されている「主観的表現」:

(89) [ヨシコが不可解にもつけ回していること]がタカシをいらだたせている。(Sells 1987: (50))

西垣内 (2015a,b) は、「不可解」は「視点投射」(Speas 2004) のひとつ「証拠性」投射 (Evid(ential)) と「一致」の関係を持つと考える。

(90) [_{EvidP} pro_i [... 不可解_i ...] Evid_i] ... タカシ_i ...

(91) a. 大学の不可解な人事を理由に、鈴木教授が辞職した。

b. 大学の不可解な人事をきっかけに、鈴木教授が辞職した。

(92) [_{NP} 鈴木教授_iが辞職した (こと)の] [_{N'} [_{EvidP} pro_i [大学の不可解_iな人事] Evid_i] (という)] [_N 理由]]

(93) a. 大学が不当に自分_iを譴責したことを理由に 鈴木教授_iが辞職した。

b.??大学が不当に自分_iを譴責したことをきっかけに 鈴木教授_iが辞職した。

(94) a. 大学が不当に自分_iを譴責したことが 鈴木教授_iの辞職の理由だ。

b.??大学が不当に自分_iを譴責したことが 鈴木教授_iの辞職のきっかけだ。

(95) 大学が不当に自分_iを譴責してしまったことが 鈴木教授_iの辞職のきっかけだ。

9. 「変項名詞句」など

(96) a. 洋子の趣味

b. タカシの身長

c. 奈緒美のケータイ番号

d. ビールの量

これらの表現は、「値」を表す表現を焦点とする「指定文」を形成することができる。

- (97) a. 海外旅行が洋子の趣味だ。
 b. 185cm がタカシの身長だ。
 c. 090-1234-1234 が奈緒美のケータイ番号だ。
 d. 2 リットルがビールの量だ。
- (98) [_{NP} 洋子の [_{N'} 海外旅行 (という) [_N 趣味]]]
- (99) 自分_iの親の家 (の住所) が 洋子_iの住所だ。
- (100) [_{NP} 洋子_iの [_{N'} 自分_iの親の家 (の住所) (という) [_N 住所]]]
 西山 (2003: 86–89) :
- (101) 洋子の住所が 変わった。
- (102) [_{DP} Op_i [_{NP} 洋子の [_{N'} t_i [_N 住所]]]]
 西山 (2003: 78–86) :
- (103) 警官が洋子の住所を尋ねた。
- (104) [_{CP} Op_i [_{NP} 洋子の [_{N'} t_i [_N 住所]]]]]
- (105) 2 リットルが タカシが飲んだビールの量 だ。
- (106) [_{NP} タカシが飲んだビールの [_{N'} 2 リットル (という) [_N 量]]]
- (107) a. 2 リットルがタカシが飲んだビールの量だ。
 b. 2 リットルがタカシが飲んだビールの量だ。
- (108) タカシが飲んだビールの量は、2 リットルだ。
- (109) a. タカシが飲むビールの量が増えている。
 b. タカシが飲むビールの量が増えている。
 c. タカシが飲むビールの量が増えている。

参 照 文 献

- Akmajian, Adrian (1970) Aspects of the grammar of focus in English. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Den Dikken, Marcel (2005) Specificational copular sentences and pseudoclefts. In: Everaert, Martin and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell companion to syntax 4*, 292–409: Blackwell Publishing.

- Engdahl, Elisabet (1986) *Constituent questions: The syntax and semantics of questions with special reference to Swedish*. Dordrecht: Springer.
- Geach, Peter Thomas (1962) *Reference and generality*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Hasegawa, Nobuko (1984) On the so-called “zero pronouns” in Japanese. *The Linguistic Review* 4, 289–341.
- Higgins, Francis Roger (1973) The pseudo-cleft construction in English. Ph.D. dissertation, MIT. Cambridge, Mass.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist theory of construal*: Blackwell.
- Huang, James C.-T. (1984) On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15, 531–574.
- Karttunen, Lauri (1977) Syntax and semantics of questions. *Linguistics and Philosophy* 1 1, 3–44.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 大修館, 東京.
- Kuroda, S-Y (1992) What can Japanese say about government and binding? In: *Japanese Syntax and Semantics*, 240–252: Springer.
- 三宅知宏 (2000) 「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』 35: 89–79.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』 くろしお出版, 東京.
- 西垣内泰介 (2015a) 「エンパシーと阻止効果—「自分」の束縛と「視点投射」—」『言語研究』 146: 109–133.
- 西垣内泰介 (2015b) 「ロゴフォリック階層と視点投射」 *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 18: 85–102.
- 西川賢哉 (2013) 「非飽和名詞を主名詞とする連体修飾節構造の意味表示」西山佑司 (編) 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 : 29–50 東京 : ひつじ書房.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房, 東京.
- Sells, Peter (1987) Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18, 445-479.
- Speas, Margaret (2004) Evidentiality, logophoricity and the syntactic representation of pragmatic features. *Lingua* 114.3, 255-276.